東医大誌　58(2)：228～229, 2000

研究会報告

TMC founded 1996 Conference of Angiology

第8回 東京医科大学脈管研究会

日　　時：平成11年9月7日（火）
午後5時30分～
場　　所：東京医科大学病院　教育棟5階講堂
当番教室：内科学教室第三講座
主　　催：東京医科大学脈管研究会
特別公演：高齢者糖尿病と血管合併症
東京都多摩老人医療センター
副院長　井藤英喜　先生

1. 新生児心雑音における心房間シャント血流の関与

（小児科学）高見　剛，武井章人，中島周子，
立花真紀，西川　康，河島尚志，宮島　祐，星加明徳
（板橋中央病院小児科）根本しおり

胎児循環から新生児循環への移行は非常にダイナミックな変化であるが、その中心はおもに動脈管と卵円孔の血流変化による。動脈管は先天性心疾患（動脈管開存症）としてだけではなく、正常新生児においても生後早期には心雑音の原因となることが多い。一方、卵円孔は生後数週間から数ヶ月の間に閉鎖し、臨床上新生児循環に影響を与えることはないと考えられている。

今回我々は、卵円孔における心房間シャント血流と新生児期心雑音の関連を調べる目的で、平成10年8月から平成11年7月までの1年間に当院および関連病院で出生した約2000人の正期産新生児を対象として、出生時、退院時（日齢5）および1ヶ月検診時に心臓聴診検査を行い、心雑音が聴取された症例に対して心臓超音波検査を行った。いわゆる機能性雑音と診断された症例は、従来の報告どおり末梢性肺動脈狭窄症が最も多く認められた。また、出生後の心房間シャント血流（卵円孔および心房中隔欠損症）が心雑音の原因と考えられた症例も経験したので、検査所見とともに報告する。

2. 糖尿病性皮膚潰瘍における末梢循環動態の検討
―加速度脈波を用いて―

（皮膚科学）柿沼美和，五十嵐勝，奥田知規，
大井綱郎，古賀道之

【目的】糖尿病性皮膚潰瘍の原因の1つに末梢循環不全がいわれている。そこで加速度脈波を用いて糖尿病性潰瘍を持つ患者の末梢循環動態の客観的評価を行った。

【対象】第A群：皮膚潰瘍を有する糖尿病患者群21人、第B群：潰瘍を有さない糖尿病患者群24人、第C群：明らかな血管病変を有さない健常人コントロール群19人の計3群に分類した。

【方法】室温で患者を仰臥位安静とし、15分後に第2または第3手指の加速度脈波b/a値とd/a値を測定した。

【結果】b/a値は3群間で有意差を認めなかった。d/a値は第A群と第B群（p=0.0441）および第A群と第C群（p=0.00526）に有意差を認めた。

【結語】加速度脈波は末梢循環動態の程度の判別に有効な指標になりうることが示唆された。

3. 頸部bruit例の臨床的検討

（老年病学）赤沢麻美，岩本俊彦，六郷則仁，
杉山　壮，岡田豊博，木暮大嗣，高崎　優

頸部で聴取されるbruitには、頸動脈付近に限局するbruitと前胸部でも聴取される広範なbruitが含まれる。そこで、これらの臨床的特徴を明らかにする目的で、頸部bruit例102例を限局群と広範群に分類し、背景因子、頭部CT所見、頸動脈超音波断層所見を検討した。限局群（n=78）、広範群（n=24）の平均年齢は各々74歳、81歳で広範群がより高齢で、女性が多かった。限局群（vs 広範群）では片側bruit例、CVD、ASO、大動脈瘤例が多く、過半数は喫煙歴を有していた。また、異常を示す頭部CT所見（梗塞巣）は55%（vs 8%）に、超音波所見では頸動脈の狭窄が33%（vs 3%）にみられ、いずれも限局群で有意に多かった。限局性bruitは頸動脈狭窄との一致率が高く、頸動脈性bruitと考えられ、一方、広範性bruitは心・大動脈由来の可能性も示唆された。以上より、多くの部位でbruitを聴診すべきで、限局性bruit例では無症候性を含めてCVDに注意する必要があると考えられた。